

## 人工林針葉樹の伐採による国産木材としての利用はネイチャーポジティブに貢献する

サステナビリティ事業コンサルティング部  
シニアコンサルタント 中田 北斗

新たなサステナビリティテーマとして、ネイチャーポジティブ(NP)が台頭してきた。先行するサステナビリティテーマであるカーボンニュートラル(CN)では、温室効果ガス(GHG)の排出・回収の場所は問わず「1トンは1トン」である。一方のNPでは、自然資本の利用による生物多様性への影響の程度は地域により異なる。

水が一例である。「再生可能な地表水および地下水の供給量に対する水の総需要量の割合」である水ストレスは、地域により異なる。世界資源研究所(World Resources Institute: WRI)が提供するAqueduct<sup>\*1</sup>は、全球スケールで水ストレスを分析している。日本の水ストレスは比較的小さい(図表1)。これは、国内における水利用が生物多様性に与える影響は他国と比較して小さいことを示す。

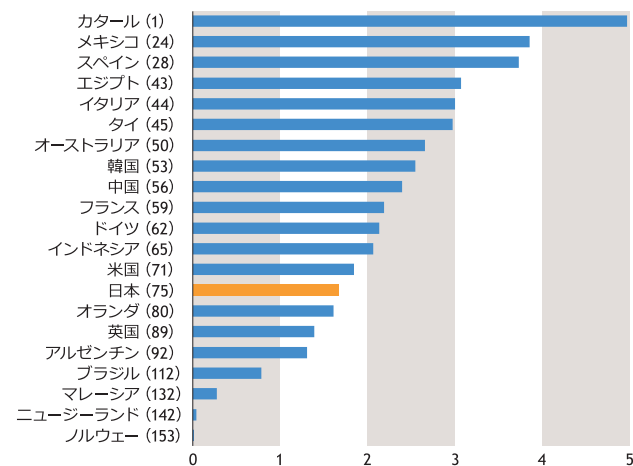
木材にも同様の考え方が適用できると考えられる。つまり、木材調達のための森林伐採が生物多様性に与える影響は地域によって異なり、この点において日本は優位性を持つ。

国内の森林面積の28%はスギあるいはヒノキの人工林針葉樹である<sup>\*2</sup>。単一樹種で構成される人工林は樹木の多様性が低く、林内の生物多様性も低いことは科学的に示されている<sup>\*3</sup>。単一樹種の人工林の伐採は、生物多様性に与える影響が相対的に小さいと考えられる。

伐採後に広葉樹などを植林し、森林の多様性を高めながら森林を更新することで、生物多様性の向上に寄与する余地もある。サントリーホールディングス株式会社が取り組む「サントリー天然水の森」では、ヒノキ林から針広混交林への転換による生物多様性の向上が確認されている<sup>\*4</sup>。

スギやヒノキの人工林は、炭素吸収量が小さい樹齢41~60年の樹木がボリュームゾーンを占めており、CNの観点で以前から伐採が好ましいとされてきた(図表2)。森林の更新および多様化を進めるために、人工林内の高齢針葉樹を伐採して木材として利用することは、CNとNPの双方に寄与するものである。こうした観点で新たな価値訴求を行うことで、国産木材の利用が広がると考えられる。

図表1 国別水ストレススコア



注) スコアはWRIの算定によるもの(2023年8月時点)。スコアが大きほど水ストレスが大きい。カッコ内の数字は対象153カ国における順位  
出所) Aqueduct Water Risk Atlas (<https://www.wri.org/aqueduct>)よりNRI作成

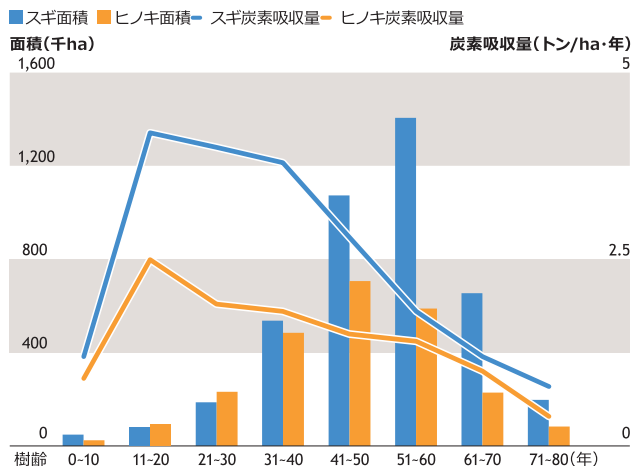
\*1 <https://www.wri.org/aqueduct>

\*2 <https://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/genkyou/h29/index.html>

\*3 清和研二「広葉樹林化に科学的根拠はあるのか?」『森林科学』2010年6月号 [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsk/59/0/59\\_KJ00006485441/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsk/59/0/59_KJ00006485441/_pdf/-char/ja)

\*4 <https://www.suntory.co.jp/eco/forest/protect/works.html>

図表2 国内のスギ・ヒノキの樹齢別面積と樹齢別炭素吸収量



出所) 林野庁「森林資源の現況 平成29年」(<https://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/genkyou/h29/index.html>)、森林・林業学習館 ([https://www.shinrin-ringyou.com/ondanka\\_boushi/tanso\\_kyusyu.php](https://www.shinrin-ringyou.com/ondanka_boushi/tanso_kyusyu.php))よりNRI作成